

前四五〇年代後半期に於けるデロス同盟の帝国化

鈴 木 雅 也

序

ペルシャ戦争の直後にデロス同盟が設立された時、その目的はあくまでギリシャ諸都市が結束してペルシャに対抗、又は復讐することにあった。同盟の性格は四五〇年代に著るしく変化し、同盟軍は同胞ペロポネソス人との戦にも投入され、同時にペルシャとの戦も続行されていた。前四四九年更に同盟は大転換を行いペルシャとの和平が結ばれた。同盟設立の本来の目的はここに失われる。しかもペリクレスは同盟を存続せしめた。盟邦都市からの貢税を以て建設された同盟艦隊はアテナイ人の指揮の下に置かれていた。従ってこの軍備はペルシャに対抗するためのものでなく、ギリシャ人に対するものであった。しかも前四四〇前代の半、アテナイにペロポネソス人との間に三〇年の平和を結んでいる。此の時同盟軍はもはや同盟内の二〇〇に近い諸都市に対するアテナイの軍事的支配に用いられる以外に用途は存しない。所謂同盟^{シユンマキア}の帝国^{アルケー}への転換である。本稿はこの帝国化に先立つ前四五〇年代の後半期に於いて同盟が帝国化への布石を行っていたか否か、行うとすればいかなる方法によったかについて、二、三の例を示して明らかにすることを目的としている。同盟内の諸都市の動きは主として Meritt, B.D., Wade-Gery, H. T., McGregor, M.F., *Attention Tribute Lists* (A.T.L.) を史料として用いた。

デロス同盟（第一次アテナイ海上同盟）の加入都市は同盟に対し同盟艦隊のための艦船及びその乗組員を提供するか、もしくは艦船にかえて艦船と同額の現金（貢税）を支払うか、そのいずれかを義務づけられていた。⁽¹⁾ 同盟成立後アテナイの將軍キモン指揮下に同盟艦隊は各地に転戦したのであるが、この間艦船提供都市はその数を減じ、貢税を支払うことによってその義務を果たそうとする傾向が表面化するに至った。此の変化の時期及びその原因について、ツキシデスはそれは同盟艦隊がナクソスを攻略した直後と、エウリュメドンの戦いの期間に起り、盟邦諸市の市民が戦に疲れ、軍事奉仕を回避し、家郷に留ることを望んだという事が原因であると記録している。⁽²⁾ 又プルタルコスによればこの変化をキモンは積極的に利用し、盟邦諸市が軍備を所有せずにその市民が軍務から離れ、ひとりアテナイのみが軍備を備え、その市民が軍務にはげむことにより、アテナイが他都市を軍事的に支配し得る絶好期と判断し、貢税支払都市への転化を積極的に推進した事実が伝えられている。しかしながらプルタルコスはその時期に關しては何等銘記していない。⁽³⁾

ナクソス攻略とエウリュメドンの戦の年代にはば前四六八年もしくは前四六七年と見られる。ウエスト (Allen Brown West) はこのツキシデスの年代に疑問を持ち前四五〇年代の終り頃、即ちキモンの帰国後に彼の意見に従って艦船提供都市が貢税支払によりその義務を果たす事となったとしている。⁽⁴⁾ ウエストの立論の根拠は前四五四―三年にはじまる貢税表に、艦船を所有していたであろうと思われるエーゲ海の島国の名が見られず、しかもこれらの島国は前四四〇年代の初期になって貢税表にその名をとどめはじめる事実にもとづいている。⁽⁵⁾ 貢税表は事実多くの島国が前四五〇年以後に相ついで貢税の支払を開始したことを示めている。プルタルコスはキモンが盟邦を貢税支払国に転化せしむる時に他の將軍達の意見に逆ってこれを行ったとのべているが、ウエストはこの言葉を重視し、エウリッ

メドンの勝利の前後のキモンの全盛時代にはキモンの意見に反対する將軍達は存在しなかったであろうと断定し、追放から帰国後のキモンの晩年期、即前四五〇年代の末期こそ最もふさわしい年代であるとし、文献史料の根拠をブルタルコスに置いている。

ウエストのテーゼに対する反論はネセルハウフ (Herbert Nesselhauf) によってなされた。⁽⁷⁾ 島国のすべてはペルシャ戦争中に於てさえ必ずしもギリシャ側に味方していたわけではない。同盟結成後に於てもアテナイに対する不信を抱いていた事は事実である。同盟に加入していたナクソス・タソスの如きはアテナイ及同盟軍によって攻略を蒙り屈服せしめられている。従って前四五四〜三年にはじまる貢税表に彼等がその名を留めていないのは、島国がアテナイに対する不信、不満に原因している事を指摘している。事実四五四〜三年はアテナイ及同盟軍がエジプトに於て同盟結成以来最初の大敗北を喫した直後にあたり、島国はアテナイに対する自らの意志を卒直に示めし、貢税支払を拒否し得る機会をつかんだものと考えられる。

此の問題に関しては最近では、ウエスト説の妥当性を認めようとする傾向を示めしながらも、いずれかに断定する決め手を缺く状態にある。しかし今主要な島国の個々について検討を加える事は此の問題に一つの解決をあたえるであらう。

ナクソスはアテナイに屈服後艦隊を所有していなかったと思われる島国である。しかし此の国が貢税表にその名をのこしているのは第二期に属する前四四八〜七年で、此の年 6% tal. が支払われ、以後ペロポネソス戦争に至るまで此の額は不変である。ナクソスは明らかに艦船提供国ではない。にもかかわらず前四五四〜三年以降の第一期に貢税支払を怠っている。さらに支払を再開した時の 6% tal. は島国のうち最も富める国と称せられたナクソスにとつて、その金額の少さが注目される。これらの事実は明らかにナクソスへのアテナイの屯田兵^{クレイ}の派遣を示している。

事実ブルタルコスはナクソスへの屯田兵の派遣がペリクレスによって行われた事を明らかにしている。⁽⁸⁾ 屯田兵の派遣

は言うまでもなく内政の監視もしくは干渉であり、アテナイの支配力の強化を示す。同時にこれを派遣された国は貢税の金を例外なく減額されることも貢税表の示す如くである。ナクソスへの屯田兵の派遣は四四八―七年以前である。プルタルコスによって屯田兵を派遣された国としてその名を示された国にアンドロスが含まれている。この国は前四五一―〇年の貢税表で 12 tal. を支払っているが、翌年 6 tal. に減額されている。⁶¹此の一年の間に屯田兵が派遣された事は明白である。恐らくこれら二国は同一の遠征によって屯田兵を送られたものであろう。カリュストスは前四五一―〇年には 7½ tal. を支払う、翌年は 2½ tal. を減額されている。⁶²これらの例は、前四五〇年頃ナクソス、アンドロス、エウボエアに対し、アテナイの屯田兵が送られ、これらの地方に対するアテナイの支配力が強化された事実を示めている。

以上の他、前四五〇年代の後半、第一期の貢税表を通じて、貢税の支払を怠ったもしくは怠ったと推定される島国はカルキス、エントリア、ヘステイアイア、キュトノス、シフノス、ステュラ、テノス、パロスの多数をあげ得る。アテナイが島国の幾つかに屯田兵を派遣した事と、島国の貢税支払を再開し始めた事実とがほぼ時を同じくしていることは明らかで、これらの国々がアテナイの武力的圧迫の下に支払をせざるを得なかったと推定され得る。前四五五年頃、六年の間死闘を展開したあげく、アテナイのエジプト遠征軍は大敗北を喫し、急ぎデロス島にあった同盟金庫をアテナイに移し、戦線を縮少しスパルタとの間には和が講じられた。ペルシャの侵攻に対する怖れと、アテナイの一時的ではあるが同盟諸邦に対する統制力の弱化は当然予想される事態であった。エーゲ海の島国が四五四―三年以後の数年間、新たにアテナイに移された同盟金庫に貢税を支払うことを拒むことは充分に推量され得る。その後、アテナイの国力の回復は、キュプロスへの大遠征となって証明されるが、上にのべた屯田兵の派遣はこの大遠征の直後にあたることを思い合せればアテナイの支配力の強化が島国をして貢税支払に向わしめたと考え得る。

ゴム (A. W. Gomme) はウエストが文献的史料としてプルタルコス・キモン伝にひたすら依存していることの危険

性を指摘している。⁽¹³⁾ ウエストは前四六〇年代のエウリュメドンの勝利の前後の時期はキモンの絶頂期にあたっており、キモンの言葉はそのまま法令となつたにちがいないと断じている。プルタルコス⁽¹⁴⁾の伝える所によればキモンは他の將軍達の反対意見を押し切つて盟邦諸市を艦船提供国から貢税支払国に転ぜしめている。従つてウエストは前四六〇年代にはキモンの意見に反対する將軍達のあろうはずがなく、もしあるとすればキモンが追放より帰国した時期、即四五〇年代の末期であるとしている。ゴムはキモンの言葉が前四六七年—四六一年の時期に於いてさへ法令と等しかったと信じ難いと論じている。事実前四六二—一年のアテナイの内政の改革以前に反キセン派に属するエフィアルテス、ペソクレスは將軍に選ばれて居り、又四六一年のキモン追放に先立ってペリクレスはキモンの彈劾演説を以て彼の政界へのデビューを飾っている。又同盟都市の市民が連戦の結果、戦に疲れ、家郷に帰ることを欲したと言う事実は前四五〇年代の末期に於てと同様に、前四六〇年代のナクソス攻略、エウリュメドンの勝利の時代にもあてはまる条件である。同盟発足以来ナクソス攻略にいたる時代は同盟にとつては連戦につぐ連戦の時代であつたことはツキシデスの示めす如くであり、むしろウエストの主張する四五〇年代の末期にはツキシデスの伝える如く三年の平和の時期の介在していたことは注目されねばならない。⁽¹⁵⁾

島国が貢税表の第一期の最後の年になつて貢税支払を開始し、第二期の前四四〇年代の初期に至つてその多くが貢税表に登録されはじめて來た事實は必ずしも艦船提供国が貢税支払に転化したがためであるとは断定し難い。それはむしろアテナイが屯田兵の派遣によつて、從來から貢税支払国であつたものに対する支配力を強化することによつて、貢税支払のサボタージュを屈服し、新たにアテナイに移された同盟金庫に貢税を支払わしむる様強制した事實を示めしている。

エーゲ海の島国がエジプトの敗戦後に於けるアテナイの戦力低下に乗じて貢税支払の義務を怠ったことは同時にこれらの島国がペルシャのエーゲ海への侵攻に備えての自衛手段であった。この様に考えるならば一層ペルシャに近い小アジア方面に於ても同様の事実が存在しなければならぬ事は必然的に推定される所である。貢税表及びその他の史料は此の方面の諸都市の反アテナイ的動向を示めしているであろうか。

前四五四～三年の最初の貢税表を翌年のそれとくらべる時、第一の表にカリヤ地方の諸都市の名が缺けていることが明らかとなる。メリット (B. D. Meritt) は前四五三年の夏頃に此の地方にアテナイが遠征を行ったと推定し、後若干の訂正を加えながら A・T・L に於てもこのことを再確認しており、最近の文献もまた A・T・L を支持している。⁽¹⁷⁾ 従ってカリヤ地区に於ても貢税支払のサボタージュがアテナイの武力行使によって支払を強制された事実がうかがえる。

カリヤ地区に比しイオニアの雄邦ミレトスとエリュトライの動向は此の時代の動きを知るために一層重要である。前四五四～三年にはミレトスはいかなる支払も行っていない。しかしながら、ミレトス人は別の都市から貢税を納めている。「レロスからのミレトス人」、「テキオウサからのミレトス人」である。⁽¹⁸⁾ ミレトスの名が貢税表にはじめて記されたのは前四五二～一である。⁽¹⁹⁾ エリュトライが同盟に復帰して貢税を納めはじめるのは前四五〇～四九年である。⁽²⁰⁾ しかしながら前四五三～二年にエリュトライの隣国ボウティアは 2 tal を支払っている。⁽²¹⁾ 四〇年代の後半に僅か一〇〇ドラクマイの貢税しか納めていない此の国の四五三～二年度の支払は異常である。明かにさきのミレトスの場合と同じくアテナイに忠誠であったエリュトライ人が隣国に逃がれて、そこからボウティアの名で貢税支払を継続したと見られる。⁽²²⁾

五〇年代の後半期に於けるこれら二国の示めした事實は、いずれも本国にクーデターがおこり反アテナイ政權が樹立された。アテナイに忠実な若干の市民は隣國にのがれ其地から納貢の義務を果たした。又その後兩國が正式に貢税表にその名を刻記されるに至ったのは反アテナイ政權が打倒された事、しかもそれはアテナイの武力的圧迫によるものであることを示している。

イオニア方面の諸都市の前四五〇年代、とくにその前半の動向はほとんど伝えられていない。しかしながらデロス同盟に関する最近の研究の結果は次の如くである。⁽²³⁾ エジプト遠征の開始の年、ミレトス、エリュトライは艦隊保有國であつた。その年兩國の艦隊は同盟艦隊としてキュプロスにあつた。たまたまりビア王イナロスのペルシャに對する反亂が生じ、アテナイはイナロスの求めに応じ、急ぎ艦隊をエジプトに急行せしめた。⁽²⁴⁾ すでにツキジデスによって伝えられる如く厭戰気分のみなぎっていた國々は不満であつたが、ミレトス、エリュトライは遠くナイル川にのぞむメンフィスへの征旅を拒むかもしくは軍備を放棄した。アテナイはこれ以後兩國に現金によって貢税を支払うことを強制し、兩國はこれを無視してアテナイから離反を企てた。これら兩國のアテナイよりの離反を援助し支持したのはペルシャの西方のサトラプであることは推定に難くない。ツキジデスの伝える所によればペルシャはスパルタに對しアテナイを背後から衝く様、多額の賄賂を以て進めている。⁽²⁵⁾ ペルシャの此の反アテナイ的煽動はエーゲ海の島々にまで及んでいたことも当然推定される所である。

エリュトライの政情に關しては、現在A・T・Lの著者によって前四五三〜二年に年代づけられている Erythrai Decree によつてうかがい知られる。⁽²⁷⁾ これはエリュトライに關してアテナイがとりきめた法令であるが、これに示された事實及びその事實から推定され得ることは次の如くである。ペルシャに支持されてアテナイから離反していた間にエリュトライには僭主政が樹立された。しかしながらアテナイは兵力を送り僭主及びその支持者を追放し、ここにアテナイ風の民主政治がしかれた。アテナイからは、文官、若干の兵力及びその指揮官が派遣され、エリュトライ人がアテ

ナイとの誓言を守るか否かを監視した。エリュトライのブルーレ及びデーモスはアテナイに対しては勿論その同盟諸国に対しても忠実でなければならず、エリュトライより追放された者は同盟の全領域からの追放を意味した。等である。ミレトスに対するアテナイのデイクリーはエリュトライに対するものにくらべて一層きびしい。⁽²³⁾ 前四五〇〜四九九年に年代づけられるこの碑文はやはりアテナイの守備兵の駐在、アテナイより派遣された五人の駐在官の存在を示めし、更にアテナイの法を犯した者は罰せられ、ある種のものはアテナイ法廷に於いて審問されることを規定している。⁽²⁴⁾

三

デロス同盟がアテナイ帝国へと転化する重要な転換期をカリアスの平和に置くことは妥当である。しかしながら前四四九年の此のアテナイの外交方針の転換を期として同盟と帝国との間に断層が存在するとは考えられない。アテナイの盟邦諸市に対する支配は、従って帝国化への準備は平和に先立つ時期に準備されていなければならない。前四五〇年代の後半、アテナイはエジプトに於ける敗戦の後エーゲ海、イオニア地方の盟邦の離反を経験する。これらの国は貢税の支払拒否によってアテナイ及び同盟からの離脱を企てている。この様な離反の根底にはペルシャの手が伸びていた事は確実に推定される所である。アテナイの盟邦諸市に対する武力的な支配、もしくは威嚇は、同盟の危機に際しアテナイによって採られた手段であった。主要な島国に対する屯田兵の派遣、イオニア地方への守備兵の派遣の如きはその例である。しかしながら此の手段は同時にアテナイ帝国への布石であった事は事実である。カリアスの平和後突如帝国化が行われたのではなく、四五〇年代に上にのべた如き方法を以て徐々にアテナイに帝国化への基礎工作を行いつつあったと断じ得る。

註 (一) Thuc. I. 96.

(二) Thuc. I. 99.

(三) Plut. Kim. 18.

(四) West, American Historical Review, 1930, 267 ff.

(五) 實定將のホノクエ註 Meritt, B.D., Wade-Gery, H.T., McGregor, M.F., The Athenian Tribute Lists, Vol II. (A.T.L.)

(六) Plut. Kim. 18.

(七) Nesselhauf, Untersuchungen zur Geschichte der Delisch-Attischen Symmachie, Klio Beiheft 1933, Leipzig p. 4, N. 1. p. 11 ff.

(八) A.T.L. No. 7.

(九) Herod. V. 28.

(一〇) Plut Per, 11.

(一一) A.T.L. No. 4. No. 5.

(一二) A.T.L. No. 4. No. 5.

(一三) Gomme, A Historical Commentary on Thucydides Vol I, 1945. Oxford. pp. 285. 286.

(一四) Thuc. I. 112.

(一五) Meritt, Documents of Athenian Tribute, 1937. Harvad University Press, p. 92, Note 59.

(一六) A.T.L. Vol III. ff. 7.

(一七) Meiggs, Russel, The Crisis of Athenian Imperialism, Harvard Studies in Classical Philology, 1963., Harvard University, pp. 4-5

(一八) A.T.L. No. 1.

(一九) A.T.L. No. 3.

(二〇) A.T.L. No. 5.

(二一) A.T.L. No. 2.

- (22) A. T. L. Vol III. pp. 253-257.
Meiggs, op. cit. p. 5.
- (23) 以上の推定は A.T.L. Vol III. p.p. 253-257 にゆづかへ、又 Meiggs. *The Growth of Athenian Imperialism*, *Journal of Hellenic Studies*, Vol LX III. 1943 も亦前四五〇年代前半期のイオニア地方、エーゲ海方面へのメデイズムの浸透を指摘している。
- (24) Thuc. I. 104.
- (25) Thuc. I. 99.
- (26) Thuc. I. 109.
- (27) Tod, M. N., *A Selection of Greek Historical Inscriptions*, Vol. I, 1951 Oxford, No. 29. *Athenian Decree relative to Erythrae*. A.T.L. Vol. II, D. 10.
- 此の碑文は、フォーヴェルによつてコムーなれたもので原石は失われている。この碑文に關してはハイビイの勞作によつて、内容が明らかにされて來たが (Highby, I. I., *The Erythrae Decree*, *Klio Beihefte* 36) 彼は此の碑文の内容は前四七〇年に同盟の外部にあったエリュトライがエウリュメドンの戦の後、もしくはその直前に同盟に加入した時のものとし、僭主政を倒しアテナイ風の民主政が樹立され僭主の再起を警戒して、アテナイの守備兵が常置されたとのべている。この年代すけに対してメイグスは貢税表を参照しつゝ詳細な碑文の分析を行い、四五〇年代の後半が此の碑文の年代であることを明らかにし、A. T. L. の著者達もこれを確認している。(Meiggs, *The Growth of Athenian Imperialism*, J.H.S. LX III, p.p. 246-248. A.T. L., Vol III. p. 255, Note 47; Meiggs, *The Crisis of Athenian Imperialism*, *Harvard Studies in Classical Philology*, 76, 1963, p. 5, Note 19) メイクスは、僭主政は四五〇年代にアテナイから此の都市が離反した時にペルシャの支持をうけて成立した僭主政で四七〇年頃のものではない事を明らかにしている。
- (28) Tod, G.H. I. No 35, *Milesian Law against Tyrant*; A.T.L. Vol, D. 10.
- (29) メイクスによればアテナイから派遣された五人の者はエリュトラエの場合の如くエピスコポイとは呼ばれず、その任務はより重要であるとしてゐる。(Meiggs, J.H.S. p.p. 25-26) メイクスは、シレントスに対するアテナイの態度はエリュトライに対する時とくらべて一層帝國主義的である指摘している。此の碑文の分析も亦メイグスによつて、行なわれ A. T. L. の著者達はこれを支持している。Meiggs, J.H.S. 25-27; A.T.L. Vol, p.p. 256-257.

The Imperialistic Policies of Athens in 450's B. C.

Résumé

The transition from the Athenian Sea League (Delian League) to the Athenian empire begin 449 B.C., when the peace is made between Athens and Persia, and it was completed before 446/5 B.C. But we must examine the history of Athens and the League from 455 B.C. to 450 B.C., in order to understand the formation of Athenian empire in early 440's B.C. In 455/54 B.C. Athens stood against the shock of Egyptian disaster. Some allies of Ionia and the island stopped paying their tribute to Athens. Athens must strengthen her control over the allies. In this article I demonstrate by some epigraphical sources that the control over allies began later 450's B.C. and the formation of Athenian empire started in this age.